

# BOOK GUIDE

## 今月のブックガイド

### ある死産と出産の体験

40歳を目前に、思いがけない妊娠と結婚。妊娠7か月での死産とその後の再妊娠。困惑や期待、深い悲しみと喜びを体験した著者の計17か月間の妊婦生活を描いたコミックエッセイである。

生理が来ない、便秘、のぼせ……ときて、著者の頭に真っ先に浮かんだのは「更年期!？」。そんな妊娠発覚は多少の戸惑いをもたらすものの、産むことを決意。産後も復帰できる仕事、家事ができる男性の存在、精神的な余裕があってこそその判断だったと著者はいう。「とくに子どもが欲しかったわけではない」と思っていたふたりは、妊娠にともなう新たな体験を共有しながら、ときにもめつつ、安定期を迎える。

そして、思いもよらない日がやってくる。大きなお腹にも慣れてきた7か月目の検診で、胎児の心臓が止まっていることを知らされるのだ。死んでしまった赤ちゃんをお腹に、妊婦ばかりの産婦人科をあとにする筆者。数日後の「処置」では、麻酔もなく強烈な痛みのなかで死産という「出産」をする。

妊娠したからといって必ずしも無事に出産できるとはかぎらない、というのはだれでも知っている。しかし、頭でわかっている、お腹のなかの赤ちゃんは生まれてくるものだと思っている。死産という現実、ハッピー満載の育児雑誌で取り上げられることはなく、なにより死産の現場である産婦人科の病院でさえ、死産した妊婦へのサポート体制や設備は十分ではない。

知らされることも、語られることも少ない死産という経験。今は、ネット上で死産にまつわる経験も書かれており、そうした場を通して、つらい気持ちを吐露したり、わかちあったりすることはできる。しかし、著者は「いつまで悪露おろが続くのか？」というような具体的な情報が知りたかったという。そのため、本書で



### 妊娠17ヵ月！ 40代で母になる！

坂井恵理著  
講談社  
定価 743 円＋税

は死産の具体的な体験がたくさん描かれている。産婦人科医の宋美玄氏のミニ解説も収録され、妊娠した人もしていない人にもわかりやすいからだのテキストにもなっている。子宮内膜症の話題も含まれている。

性にまつわる生と死、それが本書の大きなテーマであるが、もう一つ、綴られているのが、「子どもが欲しかったわけではない」という筆者の気持ちを形成した家族の話だ。家事や子育てには一切関与しなかった会社員の父親と専業主婦の母親、弟との4人家族の長女として生まれた筆者は、母親の愚痴の聞き役として育つ。母親は若くしてガンで亡くなるが、そのガン治療の入院時ですら「仕出し弁当は、飽きるから」と言い放った父親。自分が何かやるでもなければ、母親の肩代わりをする娘をねぎらうわけでもない。亡くなった母親からは「男の子なのに料理させてごめんね」という手紙が弟に遺される（ちなみに弟は料理好き男子）。

「子育ては大変」「子どもは欲しくない」という意識を形づくるのは、女性が“社会進出”したせいではない。社会に出る前の“家族”の経験のなかで、女性たちはそう考えざるを得なくなる。身近な男性たちがいかに“家族”に関わるか、いや、関わるというより彼ら自身がどんな“家族”であるか、それを見ながら子どもたちは育つのだ。本書は、新たな子どもと出会う出産体験を通して、自分自身の子ども時代をふりかえる物語ともいえるだろう。

死産の場面では、読んでいる私も涙が止まらず、無事の出産を喜ぶ様子にはまた涙。でも、目立たないマタニティマークの代わりに「妊人（うむんちゅ）」と書かれたTシャツを発案するなど、随所の小ネタに爆笑させられる。泣いて笑って、そして読み終えたときに思いを至らすのは、自分が生きてきた家族の光景。未来の“家族”という社会をつくっていくのは、これまでの“家族”体験であることを痛感させられる。

（大阪大学准教授 野坂祐子）